

お客様

むけ

元気通信

お客さま、こんにちは！ いかがお過ごしでしょうか？ ようやく春めいた陽気となりましたが、今年
は立春を過ぎてから強烈な寒波が到来し、私の居住する新潟市内も十二時間での降雪量が観測史上最大と
いう状況でした。積雪深については平成三十年の大雪時には及ばないものの降り方が強烈で、仕事帰りに
ちよつと買物に立ち寄った間にも車には数センチの積雪が・・・。慌てて払いのけるそばからまた雪が
積もる、という状況で足りないので車に乗り出発しましたが、フロントガラスはワイパーを動かすたび
に両側に雪がたまる、前後のドアガラスやリアガラスにも雪が張り付いてきて視界を狭めてくるので運転
がしにくいうえに慣れているはずの道が雪で様相が変わり、帰路がずいぶん遠く感じました。

新潟は雪国と言われていますが、新潟市の市街地は昔ほど雪が積もることがそうないということもあつ
てなのか、融雪溝や消雪パイプの敷設などはなく、まとまった雪が降るとたちまち大渋滞を引き起こしま
す。特に住宅密集地は雪の捨て場がないので、取り除いた雪は各々の家の外壁に寄せて積み上げるしかあ
りません。そこに除雪車が入ると、今度は路面の雪を道路の両脇に押しやっつていくため必然的に道幅は狭
くなり、車のすれ違いが思うようにできず幹線道路に出るまでに渋滞、やっつとの思いで幹線道路に出ても
またそこで渋滞。このような時は、普段の倍の通勤時間を見越して家を出ても危うい状況となります。

私道など除雪車が入らない道は自分たちで除雪するしかないのですが、先述のとおり道の両脇に雪を押しやるだけなので、
けでもありがたいと思わなければならないのですが、先述のとおり道の両脇に雪を押しやるだけなので、
(除雪車は大概夜中に来ます) 朝起きると、きれいに除雪しておいたはずの玄関前や車庫前に、ガチガチ
に固まった雪の塊の置き土産がゴロゴロと・・・。溜息交じりにその塊を崩し、積みあがった雪の壁にま
た積み上げるということが期間中繰り返されます。

豪雪地域に住まわれている方の大変さの比ではないと思いますが、雪捨て場や融雪溝が無い状況下では
いかんともしたがたく、せめて路面を除雪した雪は置いて行かずに海岸や河川敷には雪を持っていけるとこ
ろがあるとのことなので、積んで持つて行つてもらえないものなのかと思つてしまいますが行政側からす
れば毎年大雪が降るわけではないので、そのための予算計上はしておらない、できない、ということなの
かもしれません。それはそれで仕方ないにしても、雪だけに限らず、もし不測の事態に遭遇した時はどう
なるのでしょうか？ 昨今は自然災害が激化しており、そのためのリスク管理は企業も行政も個人も必要不可
欠になってきています。その中で、特にインフラに関するリスクは行政機関がしっかりと管理・整備をし
ていただかなければならないところだと思つのですが、果たしてどうなつていくのか？

インフラに関するリスクといえば、埼玉県八潮市で起きた下水道管の老朽化による道路陥没事故は、大
きな社会問題となりました。未だに男性一名の行方がわからないという、何ともやりきれない、切ない思
いととともに、この現象は地下という見えないうところ、我々の生活に欠かせないインフラ網が張り巡らされ
ていること、そしてその危うさを露呈することになりました。

普段当たり前のように通つていて道が突如崩れる。今回以前にも道路の陥没事故は起きていましたが、
このようなことは通常、予想だにしないでしょう。けれど、少なくともいつ、どこで、どのようなインフ
ラ整備がなされたかを把握しているのは国や県、市などの行政機関であり、危険度を判定し予算を投じ設
備更新することで事故を防ぐことができるのもまた行政機関だと思います。その予算は基本的に単年度予
算によって事業を執行していますが、これによる弊害が事実としてあるということもわかっているはずで
す。特例措置というものもあるようですが、こと国民の命と生活に直結する重要なインフラ関連の予算編
成に対しては継続・繰越などの柔軟な対応と、もし何としても予算が絶対的に足りないのであれば、その
ことを真剣に国民に対し呼びかけを行い協力を求めるところは求めるべきではないかと思つます。

今回はちよつと愚痴のような話になってしまいました。

■【酒のツマミ】

生産部 工務 係長 戸松 義秀

カミさんが旅行に行き「鮭とば」を買って来た。

それをツマミながら飲み始めた。なかなか旨い！飲んでるうちに「こんな自分で作れるんじゃないか!？」と思いYouTubeで検索するといろいろな作り方が載っている。その中でも簡単に出来るヤツを見つけた。

あとは鮭を調達するだけだと思ったが、鮭は簡単に釣ることができない為「鱒でもいいか」と思い早速釣り堀へ。

60cmクラスの鱒をゲットし半身は刺身。あとは、とば用に短冊状に切った。漬けタレは醤油、酒、白だし、ニンニク、唐辛子を、男の料理なんで適当にまぜ、1日漬け干物用のネットの中に入れ2~3週間乾燥すれば出来上がり、炙って食べてみると初めて作ったのにしては、かなり旨く酒が進む！

友達にも味見してもらおうと、かなりの好評でした。

いろんなツマミを作って飲むのが私の中でははまっている事です。

■【日本酒を飲むこと】

生産部 工務 佐藤 裕生

私はお酒の中でも特に日本酒が大好きです。

お酒といっても種類は色々ありますが、飲んでみて一番美味しく、感動したのが日本酒でした。ひとくち口に含み、透明な見た目からは想像できないほどの味わいが口に広がります。この瞬間が堪らなく好きで、日本酒を飲むことが日課になりました。最近では、好みの日本酒を見つけるために、仕事帰りに地元の酒販店に寄っては購入しています。購入する前にショーケースを覗き込みながら、味わい、香りを想像することも楽しみの一つです。

私は月に3、4本、4合瓶を開けますが、国内の消費量は落ち込むばかりで、私一人の消費量では業界に貢献できるのはごく僅かです。しかし昨年になって、日本酒や焼酎、泡盛を含めた日本の「伝統的造り」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。これをきっかけに、日本を含めた海外で日本酒が多くの人に飲まれる日が来るのが楽しみです。同時に私の消費量も増やしていきます。(健康診断で肝機能障害と診断されたので、気を付けながら笑。)

スペイン語中間報告

この長い名前の人物は誰でしょう。

Pablo Diego Jose Francisco de Paula Juan Nepomuceno Maria de los Remedios Cipriano de la Santisima Trinidad Ruiz y Picasso

最初の単語と最後の単語を合わせれば Pablo Picasso パブロ・ピカソ。Diego から Trinidad まではミドルネームで、Ruiz ルイスは父方の姓、Picasso ピカソは母方の姓。(yは英語のandの意味)。ミドルネームの数に制限はないので、落語の寿限無のような名前も作れるが、実際にはミドルネームのある人は少ない。

スペイン人の姓名は個人名+父方の姓+母方の姓が一般的で、命名時に母方の姓を先にしてもかまわないし、本人が18歳になれば順番を変更できる。スペインでは結婚しても姓は変わらないが、子供の姓は両親と異なる新たな姓が付けられる。

例えば、男性のホセ・アレハンドロ・ベルモンテ(アレハンドロは父方の姓、ベルモンテは母方の姓)と、女性のマリア・カスティージョ・デラクレス(カスティージョは父方の姓、デラクレスは母方の姓)が結婚しても、二人の姓はそのまま。

息子マヌエルが生まれると彼の姓名は、両親それぞれの父方の姓を並べてマヌエル・アレハンドロ・カスティージョになる。娘ルシアが生まれてもルシア・アレハンドロ・カスティージョで兄弟姉妹は同姓。父親と母親の父方の姓を並べるだけだから、夫婦別姓でも結婚した時点で子供の姓が自動的に決まる。一つの家族に姓が三つ、三世同居だったら姓は五つになる。日本・中国・韓国では姓は家(血縁集団)を表すもの。それに対してスペインでは個人を識別するものだから、家族同姓の必要性がない。

島貴 修一



今月の社内フラワーアレンジメント Atsuko



島貴 修一

カメラ片手に東京を歩き始めて約 10 年。何回行っても飽きさせない魅力と新たな発見がある。地方都市には無い何か、または体験できない何かに引き寄せられている。その何かとは何だろう。

まずは首都高速。

7 号線 8 号線新潟バイパスのように、都市の真ん中を通る高架道路はどこにもあるが、基本的には直線道路。しかし東京オリンピックに間に合わせるために、突貫工事で作った首都高速は、曲線と坂の複雑な組み合わせ。車でもバイクでも走った事があるが、ビルとビルの間をくねくねと縫うように走る大都会のワインディングロード。

この首都高速を下から眺めると道路と言うよりは長大な構造物。地上の道路が二次元の平面の世界なら、首都高速は空中に作られた三次元の立体の世界。特に JCT (ジャンクション) の何本もの弧を描く巨大な立体構造にカメラを向けると、ファインダーの中に造形美を見てしまう。

でも被写体としては魅力的だけど、運転するとなると話は別。車間距離も十分に取れない密集した状態でワインディングロードを駆け抜けるのは、非日常過ぎて緊張を強いられる。特にバイクでは危険と隣り合わせの走りになる。駆け抜ける興奮と快感はあるけど。

次に超高層ビル (タワマン含む)。

超高層ビルは全国の 38 都道府県にまで建てられているそうだが、地方都市では独立峰 (富士山や開聞岳) のようにぽつんと寂しい存在。それに対して都内では至る所に超高層ビルが林立している。ただしビルを下から見上げて撮るだけでは「高いなあ、大きいなあ」と感じるだけ。そこで東京タワーから都内を見下ろしてみた。

メインデッキ (高さ 150m) から見ると、眼下の港区だけでなく中央区・千代田区・新宿区・品川区方向に、低層から超高層までの様々な高さのビルがごちゃ混ぜに並んでいる。この無計画と言うか雑然とした風景が、東京の進化を表しているようで面白い。



隅田川の水の上バスから見ると、埋立地だった月島と佃島には海拔ゼロメートルから積み上げたようなタワマンがそびえている。タワマンの少し下流側に佃煮屋の看板があるので、水上バスからタワマンを背景にして看板を撮れば、佃島の過去と現在を表現できる。

その次は押し寄せる外国人観光客。

40 年くらい前にも東京を歩いたことが数回あるが、外国人観光客は少なかったし、見かけるのは欧米人ばかり。あれから 40 年。今では「何でこんな所にいるの?」と思わず言葉が出てしまうような所にも出没している。

その場所とは、銀座のビルとビルの間の人と猫?しか通れない狭くて暗い路地。探検気分ですっていったら奥に欧米人男性 3 人が立っていた。そして近づく私をチラッと見た。怪しいやつらだ、用心しよう。しかしすぐ横を通り過ぎて立ち話に夢中 (何語か不明) だったから、良からぬ事を企んでいたのではなかったようだ。それでも通り過ぎる時に頭の中では「襲われたら狭所での格闘だから裏拳打ちで目を狙い、組み付かれたら肘打ちと膝蹴りで反撃してダッシュで逃げよう」とシミュレーションしていた。

北千住駅西口近くの「せんべろ」で知られた「飲み屋横丁」は、昼でもランチの客であちこちの店に行列ができていた。そんな混雑した狭い路地にもアジア系の外国人観光客が目立つ。SNS とスマホの翻訳アプリを使えば、美味しいものに国境は無いということだ。

東京の下町風情が残っている谷根千 (谷中・根津・千駄木)。寺社と明治・大正時代の木造建築物に迷路のような狭い路地は、都会の喧噪から離れて一人静かに散策するには最適。すれ違うのは地元の人と、私と同様にカメラを持った人くらいだった・・・40 年前は。

それが今では谷中銀座は喧騒の地 (騒がしい場所) だし、路地は多くの観光客が歩いている。日本人だけでなく外国人観光客も個人やグループで散策している。外国人観光客にとって谷根千は、昔から日本人が普通に暮らしてきた所で、路地を歩けば生活の雰囲気を感じられる街らしい。観光の目的が見るから知る体験するに変わってきている。